



深井総研が製造・販売している家庭用の「創生水」生成器。中に入っているイオン交換樹脂やトルマリン、黒曜石などが水道水を「創生水」へ変える働きをする。



「創生水」を開発した、深井総研株式会社の代表取締役社長である深井利春氏。故郷の千曲川を、昔のように美しい川に戻したいという思いから開発が始まった。

エネルギー問題を解決する “燃える水”でCO₂を削減

界面活性力を持つ「創生水」という水を開発した深井総研（長野県上田市）。飲料水でありながら、洗剤としても使うことができ、さらには化石燃料と融和してエネルギーにもなるという。

The Extra Edge

世の中のトレンドをリードする
話題のモノ、ヒト、コトなどを紹介

▶ 創生水 / 深井総研

■ マレーシアなどの海外では 船の燃料として実証済み

2015年11月に開催されたCOP21（国連気候変動枠組条約第21回締約国会議）で採択されたパリ協定。この温暖化対策の国際枠組みの中で、日本は2030年度までに温室効果ガスを、2013年度比で26%削減しなければいけない。

そんな中、密かに注目を集めているのが深井総研の「創生水」である。この水の最大の特長は、油と混ざって燃料として利用できる点にある。水と油に界面活性剤を添加するエマルジョン燃料ではなく、飲料水としても飲める水である。深井総研の代表取締役社長である深井利春氏に話を聞いた。「創生水」の生成には、水にトルマリンの中を通過させる工程があり、その際にヒドロキシルイオン(OH⁻)が発生している可能性があることが分かったのです」

ヒドロキシルイオン(OH⁻)とは、1997年にイギリスのクライン博士とタッカーマン博士によって発表されたマイナスイオンのこと。遊離した水素が二つの酸素の間をピストン運動している構造を持ち、これが原子状態の水素であり、活性水素と呼ばれているものだ。原子状態の水素は分子状態の水素よりも、約3.8倍のカロリーを出すといわれている。この活性水素を燃料に利用できれば、「創生水」はクリーンで理想的なエネルギーになる可能性がある。

しかし、今までの科学では水の中に原子状態の水素は滞在できないというのが定説だった。原子状態の水素が水中に存在することを確かめる測定方法も実験されてきたが、確立するまでには至っていない。そこ

で、深井氏が選んだのが、「創生水」を車のエンジンに入れて動かすという実験だった。「エンジン」は「創生水」が不純物であるか、燃料であるかを判断してくれるレントゲンのようなもの。実際には、ガソリンだけを入れた場合よりもエンジンは長く回り続けました」と、実験の結果を振り返る。

通常の水を入れると壊れてしまうところ、「創生水」の割合を50%近くまで高めても、エンジンは問題なく動いたのだという。日本では「創生水」の運用はまだされていないが、マレーシアではすでに実績がある。2015年に「創生水」を混合させた燃料でディーゼルエンジンを搭載した漁船を航行。一度の漁でエンジンは24時間運転し続け、深井総研の調べでは基油を約55%削減することに成功したという。現在では、中国やタイでも導入されるなど、その効果は実証済みだ。また、水を入れることで腐食やトラブルが生じる懸念を払拭するために、PL保険(生産物賠償責任保険)も適用し、万全の補償体制を備えている。

「創生水」は還元力が高いことも特長で、燃料として使用するとエンジンの内部から排気ガスが出るマフラーまでピカピカになります。もはや単なる水ではないと自負しています」と、深井氏は力説する。

■自身が汚した千曲川を見て 洗剤不要の社会を目指す

深井氏が「創生水」を開発するきっかけになったのは、30年以上も昔にさかのぼる。当時、長野県で経営していたホテルやレストランから流れる排水が洗剤の泡となって千曲川に流れるのを目撃してしまった。

「すでに他界していた父は仏教に信心深く、ことあるごとに、自然と人間は一体だ。川を汚せば人間の血液が汚れ、必ず人間は病気になる。だから川を汚してはいけない」と教わったことを思い出したのです」

川を汚している張本人であることに自責の念を抱き、水を汚さないと生活が成り立たないのは不自然だと悟ったという。その後、すべての事業を売却して得たお金で、水の研究へと突き進む。そして、約10年の歳月をかけて完成させたのが「創生水」である。生成器の中には、水道水を軟水化するイオン交換樹脂、界面活性力を与えるトルマリン、水の鮮度を増大させる黒曜石などが入っており、この中を水が通ることによって「創生水」が生成されるという仕組みだ。

「創生水」は界面活性力を持つため、洗剤を一切使わずに台所仕事や洗濯などができただけではない。髪を洗ってもダメージを与えないことがなく、ナトリウムイオンを多く含むため、お風呂の湯に使っても湯冷めしにくい。さらに、料理に使えば素材の旨みを引き出し、嫌な臭いを抑える効果もあるという。しかし、最大の目的は環境の保護である。深井氏が話を続ける。

「洗剤やシャンプー、リンスなどが不要ということ、それらをつくる際に排出するCO₂も削減できるということ。洗濯はすすぎが必要なくなるので、電気代や水道代も節約できます。生活全体を考えると、CO₂の削減にも大きく貢献することができ、だから、生成器を購入される際には、お客様の洗剤類はすべて回収し、二度と使わないと約束してもらっているのです」

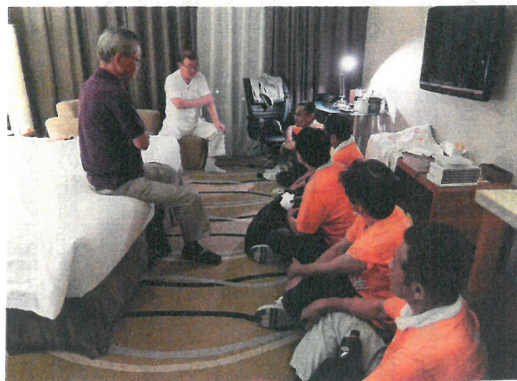
「創生水」の生成器が最も普及しているの

は一般家庭だが、美容室や飲食店でも使われている。また、深井総研では工場をはじめとした事業所で使われる大型の生成器も製造しており、環境保護という時流に乗って、さらなる普及が見込まれている。

■持続可能な社会を実現する 無限の可能性を秘めた水

「創生水」が燃料になることは証明されているが、実はどうしてそのようなことが起きているのかはまだ説明されていない。そのため、「創生水」を知ってもらうための第一歩として、深井氏は8月28日から9月2日にかけて、スウェーデンのストックホルムで開催される、「ワールド・ウォーター・ウィーク2016」に参加する予定だ。これは、ストックホルム水研究所(SIWI)が主催するもので、世界各地の水に関するさまざまな問題に取り組む。世界的に最も影響力のある水の国際会議で、過去12年間を見ても日本の民間企業が参加するのは初めてである。世界各国から大臣、政府関係者、研究者、国連機関やNGO団体の関係者など、約3000人が集まるなかで「創生水」の無限の可能性が紹介される。

学術的見地では、この水が果たしてどのようなエネルギーを発するものなのかは、まだ研究過程である。しかし、今後4年間にわたり、九州大学の富川武記准教授との共同研究が始まっている。「創生水」の謎を解き明かすには相応の時間が必要だが、環境問題を解決する鍵を握っていることは確かだろう。持続可能な社会をつくりたいという深井氏の思いによって、日本で生まれた技術が大輪の花を咲かせるかもしれない。



マレーシアでの設置作業後に行われたミーティングの様子。



上海の協力会社内でのディーゼル発電機公開テストの様子。

創生水に
詳しい情報は、
下記QRコード
よりアクセス

